

倫理

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

令和6年度（第4回）共通テストの「倫理」の問題作成の方針は次のとおりである。「人間としての在り方生き方に関わる倫理的課題についての多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。」

なお、評価に当たっては、14 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

第1問 思想の継承と批判について（源流思想）

高校生と大学生の会話を基に、原典などの諸資料を用いながら、思想の継承と批判について多面的・多角的に考察させる大問である。設問の切り口に戸惑った受験者は少なくないと思われるが、思想がいかに批判や再解釈をされて発展してきたかは「倫理」において重要であり、学習の有り方に一石を投じた大問といえる。源流思想からバランスよく出題され、資料を用いた設問も知識の理解を組み合わせて正解に至る形式が採られており、「倫理」の問題として適切であった。教科書で詳細に扱われることが少ない知識が含まれていたり、全ての文に正誤判定を求める問題形式が採られていたりする設問はやや難しいが、受験者がよく勉強してくる分野であることを踏まえると、全体的には標準的な難易度といえる。

問1 ギリシア哲学の継承について、プラトン哲学と神秘主義の結びつきなど、学習が手薄になりがちな事項を含む設問である。全ての文に詳細な正誤判定を求めており、知識事項が基本的でも平易にはならない問題形式といえる。全体的にみて、難易度が高い。

問2 儒教や関連する思想についての設問である。求められる知識・理解はごく基本的であるが、全ての文に詳細な正誤判定を求める問題形式であるため、やや難易度が高い。

問3 先行する思想を批判した古代の思想家に関する設問である。おおむね基本的な理解を問うものだが、「地上の国」「神の国」については説明がない教科書もある。

問4 古代インドの思想と中国の伝統思想との接触を取り上げた興味深い設問である。資料をもとに、会話文でヒントを与えながら解釈を進める流れになっている。知識の本質的な理解と資料読解力をバランスよく求める良問である。

問5 イエスの思想に関する理解を問う設問である。「ユダヤ教をめぐるイエスの言動」という語句にやや混乱するが、特に正解となる選択肢が正文と判定しやすく、平易である。

問6 預言者に関するイスラームの考え方についての理解を問う設問である。基礎を定着させていけば迷わず解ける標準的な難易度である。

問7 ギリシアの自然哲学者たちの考え方の特徴を捉える設問である。選択肢の判別がしやすいことから、標準的な難易度といえる。ただし、資料とノートの内容的な対応がやや分かりにくく、問題形式が違ったら難問になったと思われる。

問8 縁起の思想に着目して、資料の解釈を掘り下げる設問である。資料は抽象度が高く、解説

を踏まえても難解と感じた受験者が多いと思われる。しかし、2択のうち適切な文を判別するのは難しくはない。会話文によるガイドなど、よく工夫された設問である。

第2問 「日本人と平和」について（日本思想）

「日本人と平和」に関して、高校生と祖母の会話、原典資料、祖母からのメッセージなどを通じて考えを深めさせる大問である。世界が再び平和から遠ざかろうとしている昨今にあり、意義深いテーマであった。図書館を活用した調べ学習の場面が設定されており、既得の知識と資料の読み取りを組み合わせさせた良問もあったが、高校生が主体的に考察を行う所まで探究的な学びを深められているとは言えなかった。文章量は適切で、出題範囲も古代から近現代までバランスが取れていたが、教科書での取扱いが少ない思想家や用語についての言及もあり、やや難易度が高い設問が含まれていた。

問1 日本の神々と災害についての理解を問う、きわめて平易な設問である。

問2 古代日本の仏教についての説明の正誤を判断する設問である。浄土信仰が平安時代末期に広まったこと、源信の時代は称名念仏ではなく観想念仏が中心であったことを踏まえれば解答できるが、難易度が高かった。4択にするなど、出題形式の改善を望みたい。

問3 無常観の説明及び、鴨長明の『方丈記』と吉田兼好の『徒然草』の原典資料の読み取りを組み合わせさせた、平易な設問である。

問4 江戸時代の儒教についての理解を問う良問である。古学派が朱子学批判を通じて形成されたことを踏まえれば解答できる。山崎闇斎の垂加神道に関する③を選んだ受験者も多かった。

問5 石田梅岩の思想について、正しい説明の組合せを9肢から選ぶ設問で、アが安藤昌益、エが山片蟠桃についての説明であると分かれば解答できる。「営利活動を肯定する思想」を一つのヒントとして、正答を選ぶこともできよう。

問6 横井小楠の思想に関する知識と、原典資料の読み取りを組み合わせさせた設問である。原典資料の読み取りは容易だが、横井小楠を和魂洋才の文脈に位置づけておらず、①を選んだ受験者もいた。

問7 平和を説いた近現代の思想家の説明についての設問である。石橋湛山の小日本主義と与謝野晶子が関わった母性保護論争は教科書での取扱いが少なく、判断に迷った受験者が多かった。細かい知識を増やして消去法で解かせるのではなく、多くの教科書で扱われる思想家の思想内容の正誤を精緻に判断させるなどして、難易度を上げることが望ましい。

問8 吉野源三郎の原典資料を読解する平易な設問である。初見の資料を単に読解するだけではなく、教科書で学んだ既得知識、人間的な在り方生き方についての見方・考え方を活用し、大問のテーマに関する思索の深まりを感じさせる設問となるよう改善を望みたい。

第3問 美の普遍性と多様性（西洋近現代思想）

芸術作品の鑑賞という場面設定から、美の普遍性と時代性、また美に関する自己の個性と他者の評価の関係や、美と社会的不平等の問題などについて、カントやヒューム、ルソーの興味深い資料を提示するなど、西洋近現代の先哲の思想を手がかりにしながら、美について多様な視点で探究する内容で、「倫理」の授業における探究学習の可能性を示す大問となっている。しかし、設問ごとの難易度には少しばらつきがあり、全体としてはやや難易度が高い。

問1 ルネサンスについての基本的知識があれば解答できる。タブレットでの検索結果の正誤を問う出題形式で、情報活用能力を意識させる工夫がされている。

問2 カルヴァンの思想の内容とそれがもたらした影響について問われている。カルヴィニズムに関する確かな知識が求められ、やや難易度が高い。

問3 カントに関する説明と資料の読み取りを組み合わせさせた設問であるが、説明と資料との関

連はやや弱い。資料の読み取りは平易であるが、カントにおける「独断のまどろみ」のエピソードや、物自体と現象の区別を理解していることが求められる。

- 問4 資料の読解力が問われている。ヒュームの主張をきちんと読解すれば解答できる。
- 問5 資料の読み取りからルソーの説く不平等の起源の中に「世間の評判」があることに気づかせるとともに、ルソーの思想における自己保存の欲求や私有財産の問題も理解しているかを同時に確認できるように選択肢を工夫しており、難易度は高いが良問である。
- 問6 「ルサンチマンに基づいているとニーチェが批判した思想」という問い方がやや分かりにくい。正解の選択肢もルサンチマンとの関連が分かりにくいので、例えば「来世に救いを求めて」という語句を入れ、現世の否定につながる思想であることを示唆するなどの工夫が求められる。
- 問7 ミルの思想について、質的功利主義だけでなく、他者危害の原則や少数派の尊重に関する部分まで問う難易度の高い設問であるが、イとウは説明の文章自体がやや分かりづらく、記述の正誤の判断がしにくい。ここでは文章の読解よりはミルの思想の理解を試したいところである。
- 問8 第3問全体の趣旨を問う設問となっている。可能なら問4のヒュームの資料も反映する内容であれば更に良かった。

第4問 「後悔」について（現代の諸課題と青年期）

高校生の会話文や実験資料、哲学者の資料を通し、「後悔」についての思索を深める大問である。「後悔」の捉え方を多面的・多角的に考察する工夫がされており、受験者に対するメッセージ性があった。基本的な用語の理解だけでなく、思想家についての細かい内容の理解や、表の読み取り、思考力を問う設問がバランスよく含まれており、全体的な難易度としては標準である。

問1 フランクフルト、ヴァイツゼッカーの思想に関する設問であり、頻出度が少なく内容理解が浅くなりやすい部分である。フランクフルトの部分で選択に悩んだ受験者が多いのではないだろうか。

- 問2 現代日本における諸問題についての設問である。難易度は平易である。
- 問3 情報技術についての用語の理解を問う設問である。代表的な思想と比較し時間をかける割合が少なくなる部分でもあるため、確信をもって解答できた受験者は少ないように思う。ブーアスティンについては取り扱っていない教科書もあり、やや難易度が高い。
- 問4 後悔に関連した実験に関する資料と表を読み取り、空欄に文章を当てはめる設問である。資料の読み取りだけでなく、それを活用した思考力を問うことのできる良問である。
- 問5 ハヴィガースト、ピアジェに関する基本的知識が問われている。クーリーの選択肢をエリックソンなどの心理学者に変えることで、受験者の知識をよりはかることができたように思う。
- 問6 心理状態に関わる用語についての理解を問う設問である。欲求、防衛機制についての基本的な理解があれば難しくはなく、難易度は標準的である。
- 問7 (1) ハイデガーの思想に関する設問である。①の説明がやや分かりづらく、そのため解答に迷った生徒がいたのではないだろうか。後期ハイデガーに関する細かい理解が求められた設問であり、難易度は高い。
- 問7 (2) 哲学者 J. ラズの資料の読解であり、丁寧に読み解けば正答を導くことができる。難易度としては平易であるため、他の資料や会話文との関連などの工夫が欲しい。
- 問8 会話中の空所に入る文を判断する設問。空所に当てはめる問いとしては標準的な難易度であるため、哲学的な用語や思想の理解を組み合わせるような工夫があるとよい。第4問全体をまとめる高校生の会話に受験者へのメッセージ性がある。

3 分量・程度

試験問題の分量は、大問4題、総設問数33問で昨年と同様であり、適切な設問数である。設問によっては一つあたりの分量が多いものもあったが、全体としての分量は受験者が時間内に解くことができるものであり、過去の共通テストを参考に準備をしていれば問題はないであろう。問題全体を通じて、資料の読み取りに基づいた思考力・判断力・表現力等や、包括的知識を問う設問が多く見られた。各大問に資料問題が3問程度あり、興味深い資料が多く用いられていた。しかし、資料問題が豊富である反面、各設問にかかる時間が少なくなり、一つの資料に対する読み込みが浅くなる可能性がある。資料自体は興味深いものが多くあるため、一つの資料に対し複数の設問を出題する方法も考えられる。また、教科書等で頻出度の低い思想家や用語についての出題では資料や会話を組み合わせて考察させることで解答することができるよう配慮されたい。難解な問題の中にはあったが、いずれの大問もバランスよく出題内容や出題範囲が取り上げられており、全体の難易度としては標準である。試験問題を通して現代の青少年に思索を深めさせたいという作問者の意図が感じられた。

4 表現・形式

各設問の文章表現・用語についてはおおむね適切であった。原典資料が多く、中にはやや難解なものもあるが、会話文などによってほどよく解説されていた。ほとんどの大問・小問が会話文を基に構成されており、高校生の間の会話だけでなく、大学生や祖母など、先哲を含むさまざまな他者との対話を通して思索を深めるという「倫理」の本質的な特徴を意識した設定になっている。設問の形式について、正誤の組合せとして正しいものを選ばせる問題や適当なものを全て選ばせる問題は、全ての選択肢について正誤の詳細な判定を求めることになり、難易度が高くなりがちであるので留意してほしい。また、一部ではあるが、「倫理」の内容理解度と関係なく、設問や選択肢の文意が分かりにくい表現が見られた。写真や絵画資料は用いられておらず、図表の扱いは適切であった。全体を通して、原典資料などに表れた先哲の思想を基点に、他者との対話によって問いを掘り下げ、思索を深めていく学びの過程を表現した作問であり、授業改善に示唆を与える大問であった。

5 まとめ（総括的な評価）

本年度の共通テストの公民科受験者は171,614人（昨年度は173,903人）であった。そのうち「倫理」の受験者は18,199人（昨年度19,878人）であり、昨年度と比べて1,679人減少した。公民科における「倫理」の選択率は10.5%で、令和3年度の共通テストの開始以降、11.3%、12.5%、11.4%と推移した中で比べるとやや低かった。出題においては、「倫理」の授業における課題や論点を基に、生徒が教員や他の生徒だけでなく、大学生や祖母と対話し、勉強会の開催や講演会への参加、図書館の活用をするなど、他者と協働しながら主体的に探究していく姿が描かれていた。高等学校等の「倫理」の授業者に対して、授業を探究型へ発展させる手掛かりを示すとともに、受験者に対して、学ぶ姿勢を生活の中で生かすよう促すものであった点に、出題者のメッセージが感じられた。設問の題材も原典資料以外に、生徒のノートやメモ、祖母のメッセージ、インターネットの検索結果、実験のデータがあり、よく工夫されていた。ただ、中には「倫理」の学習内容との関連付けが弱く、読解力のみを問うものとなっていたり、教科書で採り上げられることが少ない先哲やその思想に関する内容となっていたりして、難易度にばらつきがあったので、さらなる工夫を求めたい。全体としては適切な難易度で、設問のバランスも取れていた。